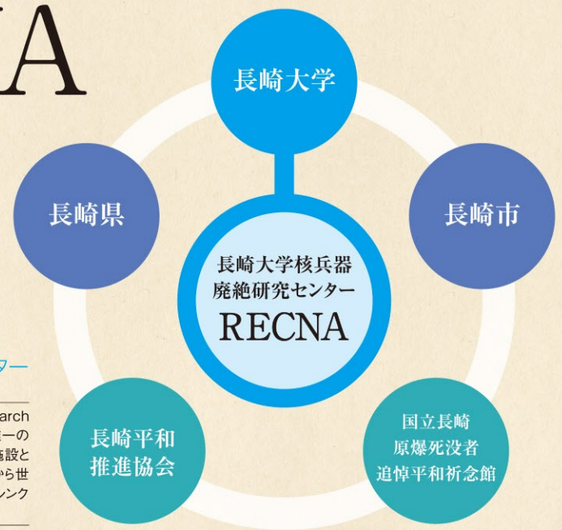
地域で活かされる
長崎大学の
知
Knowledge of Nagasaki University
Vol.2

核軍縮に特化した日本でもまれな存在 RECNA



RECNA
長崎大学核兵器廃絶研究センター

RECNAとは長崎大学核兵器廃絶研究センター（Research Center for Nuclear Wepons Abolition ）の略。世界唯一の被爆医科大学の歴史を継承する長崎大学の共同研究施設として、核兵器廃絶に向けた情報や提言をさまざまな角度から世界に発信します。また、一般市民のために地域に開かれたシンクタンクとして運営されるものです。

世界の核軍縮の情報をより早くわかりやすく

今年五月、ニューヨークで開かれた国連NPT（核不拡散条約）再検討会議のための準備会議に長崎の若者八名が参加し、日本のメディアでも大きく報道されました。この「ナガサキ・ユース代表団」を企画した核兵器廃絶長崎連絡協議会は、長崎県と長崎市、そして長崎大学の三者が連携協定を結んだ組織です。長崎大学核兵器廃絶研究センター（RECNA（レクナ））がプロジェクトの企画運営をしています。文教キャンパスにRECNAが誕生して丸二年。長崎でも、その存在感は次第に大きくなっています。広瀬訓副センター長にRECNAのこれまでとこれからを語っていただきました。

「ナガサキ・ユース代表団は二年目ですが、これまであまり活性化されていなかった大学生などの若い層が核軍縮の現場の空気を経験することは、将来につながる動きとして意義深いと考えます。今の季節、一番関心があるのは、今年の長崎原爆の日にどんな要人が来崎するかですね。一昨年は、包括的核実験禁止条約機関（CTBTO）の準備事務局長だったティボル・トート大使をお迎えして、学生主体で市民向けの公開シンポジウムを企画しました。みなさん被爆地長崎で市民と対話できるチャンスを好意的に受け止めてくれます。また、この時の学生のなかから、ユース代表団のメンバーも育っています」。

核軍縮の第一線で活躍する方々の生のお話が聞ける機会が、長崎でもぐんと増えましたね。

「はい。そのほか、北東アジア非核兵器地帯設置にむけての国際共同研究では、中国、韓国、オーストラリア、アメリカの専門家などを一堂に集め、国際ワークショップを開催してきました。今年は九月に東京で開催する予定で、その後は参加者のダナパラ元国連事務次長に長崎まで来ていただき、市民向け講演会も開く予定です。RECNAの役割は、こういった情報発信事業のほかに、データベース作りが大きな柱となります。長崎でいえば過去の被爆の実相や語り部事業は原爆資料館が中心となって担っていますが、核軍縮の共同研究や国際協定の情報といったジャンルは弱く、これまで海外からアプローチがあっても応えきれませんでした。そんななか、RECNAの場合は核軍縮に特化した専門家が揃っており、データベース作りにも力を注げます。数年がかりで構築した『世界の核弾頭』データベースは、核武装を進めている国々の保有核兵器だけでなく、現在の核兵器開発計画やミサイル発射テストなどの情報も盛り込み、市民も気軽に活用できます」。

インパクトのある核弾頭データのポスターが話題になりました。人材育成についてはどうでしょう。

「市民講座は継続して行っているのですが、そのダイジェスト版をインターネットで配信する試みを始めています。最近気づいたことがあります。長崎市内の子どもたちや県外からの修学旅行生は平和教育に接する機会があるのですが、長崎市外で県内の子どもたち、例えば離島では、核や軍縮について専門家から話を聞く機会に乏しく、非核意識には温度差があるんですね。そこで今年度からは県と協同して、対馬や五島の県立高校に出張講師として出向くことも始めました。

CTBTOのような国際組織のスタッフと話していて実感するのは、技術だけでなく、平和への意識の高いエンジニアを求めていること。また、海洋地質学の知識を持ちながら外交官になって海底資源の問題を扱うなど、文理融合は現場レベルでどんどん進んでいます。そういう話を通じて、長崎の若者を刺激していきたいですね」。

核軍縮のデータベース作りと情報発信、そして人材育成。RECNAの取り組みは、年を追うごとに広く確実に実績を積み重ねています。

昨年八月に発表されたRECNAオリジナルの核弾頭データポスター。

ナガサキ・ユース代表団
（2014年5月、ニューヨーク国連本部にて）

門戸は広く県下の大学生、院生、同年代の若者に開かれていますが、今回、公募で選ばれたのは、くしくも長崎大学の学生、それも女子ばかりとなりました。NPT会議のモニタリングができる程度の英語力や、核問題への関心に関する選抜試験があります。ユースの報告会では、国連NPT準備委員会議長や各国からの参加者へのインタビューをまとめたVTRを流し、ドイツの若者グループとのディスカッションの様子を報告。「議論の現場では市民の声が届いている事実を実感した」「世界には核兵器をなくしたいと考えて活動する若者が多かった」「これらの出会いを活かして新たなネットワークを築いていきたい」と、自身の生の言葉で感想を語りました。

2012年12月に長崎大学の文教スカイホールで開催された「北東アジア非核兵器地帯への包括的アプローチ」の公開セッション。

国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館で行われている市民講座の様子。

2012年、ティボル・トート大使を迎えての公開シンポジウムを開催。